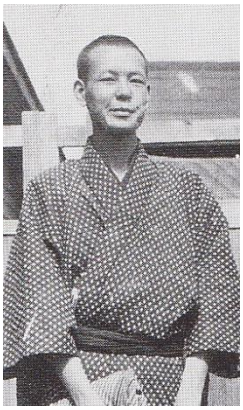
「森銑三刈谷の会」だより　No. 10

発行　2022 年 7 月 16 日（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第 3 土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー　刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp



森銑三肖像（左：20 代の頃、刈谷市教育委員会「森銑三生誕百年没後十年記念展」冊子より。右：39 歳［裏書「昭和 10 年 3 月」］刈谷市歴史博物館所蔵）

第 10 回（2022/6/18）「写真と文に見る森銑三の人柄」参加 12 人　（神谷磨利子）

森銑三に出会った人々が、銑三のことをどのように見ていたかをまとめてみた。『森銑三著作集』月報、『同　続編』月報、『ももんが』森銑三氏追悼特輯（1986 年 4 月）などに掲載の文章から森銑三の日常について知ることができた。「すっきりと姿勢のよい長身と謹厳な中にも和気の漂った顔だち」というのは多くの執筆者に共通の印象であった。戦前は和服の袴姿で歩き方は颯爽と、また背筋を伸ばし小机の前で端然と正座して古書を読んでおられたという。その姿を「古武士をしのばせる」と評する人も多い。鉛筆の愛好家で、筆跡もその居住まいと同様謹厳端正であった。丸刈りの頭髪を、紙面の肖像写真右上のようにオールバックの髪形にするのは、名古屋図書館時代（28－30 歳）であった（森三郎「若き日の兄銑三の思い出」）。

1945 年 4 月 13 日に空襲で罹災し、衣食住と研究資料を失った。戦後は洋服に変わる。曇りの日には雨傘と雨靴という用意周到な性格であったらしい。

1971 年 6 月の『中央公論　臨時増刊歴史と人物 3』「文人の顔　森銑三氏の日々」は日比谷図書館特殊資料係の若い職員たちと歓談する銑三の写真を載せている。銑三の指導を受ける時間が待ち遠しく、充実の時であったという職員の言葉が裏付けられる。「日比谷図書館での様子は、刈谷図書館で〈のっぽのお兄さん〉と子どもたちに慕われていた姿と重なる」（河橋育実）、「父（教え子・尾崎銑三）の言っていた先生の姿はこういうことだったのかと分かる」（尾崎隆）などの感想が出た。また 1975 年 3 月 17 日の『毎日新聞』「わが人生のとき」で、銑三はどのように伝記の仕事をしたかを語っている。「地道な研究の積み重ねで『佐善雪渓』などの伝記を書きあげた姿勢に感銘を受けた」（神谷明子）という声も上がった。

「銑三さんが生身の人間として近づいた」（塚本吉英）、「銑三さんの生き生きした姿が浮かび上がってきた」（山田宇多子）、「銑三さんを知るのに面白い切り口であった」（兵藤吾津夫）、「銑三さんの用意周到振りを数学の岡潔と並べた表現が面白い」（飯田芳子）など、森銑三の人柄を共有できた会となった。

今回銑三さんはお写真通り、本当の紳士であられることを文面でいろいろ紹介して頂き知ることができました。そのお人柄が多くの人との出会い・巡り会いを生み学究の道が切り開かれたようです。銑三さんの少年のようなお声を聞いてみたいものです。（竹中良枝）

---

10 回を数えた森銑三刈谷の会

鈴木　哲

2021/9/11（土）発足から 10 回の例会を数えた。発足会で森銑三関連文献 100 余点を紹介したが、森銑三の世界は想像以上に深く、広い。銑三は「読むことと、書くことと」の人で、近世学芸史・書誌学者よりも近世伝記家である。著作集刊行を喜んだが、続編は没後である。銑三を知るには著作集「月報」が欠かせない。三郎が刈谷を離れたのは 1925-45 年の 20 年だが、銑三は 1919-85 年のほとんどを東京と藤沢市で過ごした。

参加者は 15 人程度で安定している。銑三が種をまいた図書館で話し合っている姿を、泉下の伝記家は「和気の漂った顔だち」で眺めているように感じる。

今後予定

11. 2022/7/16(土)「森銑三『愛知県三河の七夕』」を読む＋正木敦子「起こし絵」解説
12. 2022/8/20（土）「森銑三の健康法と病歴」

※ 2022/9/11（日）刈谷市郷土文化研究会第 3 回談話会 神谷磨利子「森銑三刈谷の会の活動 1 年」

13. 2022/9/17（土）鈴木哲「森銑三訃報新聞記事」